

岡山天文博物館リニューアル！

栗野 諭 美

〈岡山天文博物館館長 〒719-0232 岡山県浅口市鴨方町本庄 3037-5〉

e-mail: awano@oam-chikurinji.jp



天体観測のメッカとして知られた竹林寺山では、いま新たな取り組みが始まろうとしています。そんななか、2018年3月、岡山天文博物館もリニューアルオープン！ここでは、新しくなった博物館と、国立天文台および京都大学との連携事業について紹介します。

1. はじめに

竹林寺山の山道を上っていくと、大きな二つのドームの真ん中に突如華やかな建物が現れます。これが岡山天文博物館です。2018年3月にリニューアルオープンし、外観が一新しました。

岡山は古くから天文学の盛んなところで、数々のプロやアマチュア天文学家が活躍してきました。国内ではじめての本格的な大望遠鏡が設置されたのも、ここ岡山県浅口市（当時の鴨方町）。1960年に東京大学東京天文台の附属施設として岡山天体物理観測所（岡山観測所）が開所して以来、最先端の研究をすすめる天体観測のメッカとして知られてきました。メイン望遠鏡である188 cm望遠鏡は、建設当時は東洋一、現在も国内最大級の望遠鏡として、太陽系外惑星探査など、世界の天文台と肩を並べて活躍しているのは、みなさんご存知のとおりです。地元の方々にとっても188 cm望遠鏡は古くからまちのシンボル！竹林寺天文台の愛称でずっと親しまれてきました。

もともと観測所の誘致には、岡山県をはじめ、地元三町（鴨方、矢掛、金光）の熱心な誘致活動や協力がありました¹⁾。元岡山天文博物館館長の藤井永喜雄氏も誘致にかかわられた方のお一人です。また数々の天文学者を輩出してきた金光学園では、昭和26年から天文部が活躍し、藤井氏を

はじめ多くの方の指導を受け、いまま天文気象部と名を変えながら活動を続けています。私の恩師の定金晃三先生や、佐治天文台長であり岡山観測所設置のための試験観測で活躍された香西洋樹氏も金光学園のご出身で、よく当時のお話をお聞かせいただいたものです。

そして2018年7月、ついに京都大学岡山天文台「せいめい望遠鏡」が完成しました。この望遠鏡の口径は3.8 m。岡山観測所188 cm望遠鏡の約2倍の大きさで、東アジア最大の望遠鏡として、また世界に誇る新技術は、将来の超大型望遠鏡を作る技術としても期待されています。

岡山天文博物館は、そんな二つの研究機関を紹介する展示室をはじめ、プラネタリウムや太陽望



図1 リニューアルした岡山天文博物館。外壁は国内外で活躍中のグラフィックアーティスト SUIKO氏が宇宙をイメージしてデザイン。

遠鏡などを備え、一般の方々が楽しめる天文教育・普及の場として、浅口市が運営しています。開館したのは岡山観測所の開所と同じ1960年。もうすぐ還暦を迎える歴史ある施設です。

2. 恵まれた環境。昔から観測適地？

さて冒頭でも書きましたが、博物館と観測所は浅口市鴨方町と小田郡矢掛町にまたがる竹林寺山の一角（標高約350 m）にあります。山からの眺めは素晴らしく、南には瀬戸内海が広がり、瀬戸内の島々や瀬戸大橋、四国連山を見ることができます。また冬の空気が澄んだ時期には、運が良ければ遠く北の方角に雪をかぶった大山が見られることもあります。

竹林寺山にはいくつかの遺跡もあり、観測所建設の際には数々の遺跡が見つかりました。最近の京大望遠鏡計画のために行われた発掘調査（竹林寺天文台遺跡）でも、古墳時代以降と弥生時代後期の遺構が見つかり、関心を集めました。

また博物館周辺には、天文道を学び伝えた陰陽師として知られる安倍晴明にまつわる伝説も数多く残っています。竹林寺山の隣にある阿部山は、安倍晴明が天体観測のために居を構えたと伝えられており、その名も「あべ」に由来するといわれています。さらに浅口市内各地には、晴明やそのライバルとして知られる芦屋道満の墓など、ゆかりの地も数多く残っています。晴明と道満両氏ゆかりの地が残る場所は少ないようですが、興味深いことに大望遠鏡を備えた兵庫県立西はりま天文台のある佐用町にもあるとか。さらに京大3.8 m望遠鏡の名前も「せいめい望遠鏡」に決定。大望遠鏡と安倍晴明…なにかを感じるのはきっと私だけではないはず。

3. リニューアル！そしてこれから

岡山観測所の開所とともに開館した博物館は、開館当初は観測所設置の際に当時の三木岡山県知事と稲田文部事務次官の間で交わされた覚書の中

に「展示館を設置・整備する」とあったことから、県知事と東京大学総長との協議の上設置、運営は岡山県と金光・鴨方・矢掛の三町と東京大学で構成された運営委員会で行われてきました。その後1988年の国立天文台への改組に伴い、1989年岡山県から鴨方町（現・浅口市）へ移管、そのとき光学式プラネタリウム（ミノルタ製MS-10）と太陽望遠鏡（五藤光学）が設置されました。2008年には、国立天文台の協力のもと四次元デジタル宇宙シアター（4D2U）を導入し常時上映がスタート、3D映像を見ながら宇宙旅行を体験できるこのシアターは子どもから大人まで大人気で、このシアター目当てに訪れる来館者も増えました。さらに2011年にはデジタル式プラネタリウム投射機が増設され、光学式投射機の映し出す美しい星空とともに、ドーム全体に迫力ある映像を投射できるようになり、プラネタリウムの魅力が広がりました。

少しずつ充実を図る中、京大3.8 m望遠鏡の実現が具体的にになると、浅口市も町をあげて「天文のまちあさくち」を掲げていくことを決定し、なんと博物館も大幅なりニューアルを検討していくことに！交付金を活用し、インターネットを活用した展示解説や大型モニター展示の導入等、展示の充実からスタートした計画は（予想以上の）急



図2 最新型の光学式投射 CosmoLeapΣ。
素晴らしい星空が広がります！

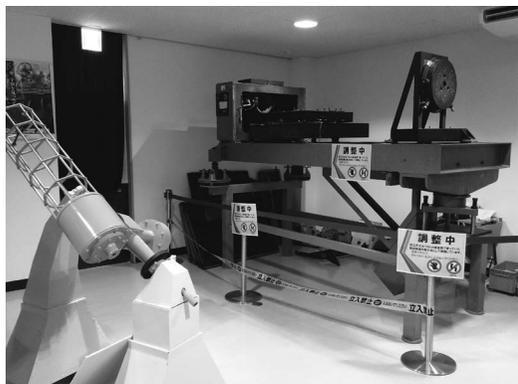


図3 長年にわたり活躍してきたクーデ式分光器。

ピッチで進み、2017年には約半年の施設増改築工事が実現、ついに2018年3月リニューアルオープンとなりました。

今回のリニューアルのポイントは、施設の増改築、そしてプラネタリウムの更新です。

博物館の南側には吹き抜け・全面ガラス張りの大ホールが登場。また、屋上には展望スペース、さらに玄関前にはウッドデッキが設置され、美しい瀬戸内の風景や京都大学岡山天文台の雄姿を眺めながらゆっくり過ごしてもらえるようになりました。またプラネタリウムは、国内初導入となるコニカミノルタ製の最新型光学式投影機Cosmo LeapΣ 1号機を設置。デジタル式プラネタリウムも更新し、光学式とデジタル式をシームレスにつなぐ次世代統合型システムに生まれ変わりました。ドームに映る星空は、夜空に輝く本物の恒星にせまる美しさで、新旧多くのファンの方々を楽しませてくれています。

展示室は従来の懐かしい雰囲気を残しつつ、国立天文台や京都大学関連の模型やパネル、旧観測装置等が並びます。この秋には、岡山観測所で長年活躍してきたクーデ式分光器が新たに仲間入り。美しいスペクトルを見ていただけるように、これから調整を始めていきます。

また“本物の”188 cm望遠鏡やせいめい望遠鏡の公開も予定しています。これまで国立天文台では夏の特別公開と年に2回の特別観望会を開催してきましたが、今夏、国立天文台、東京工業大学、浅口市の間で188 cm望遠鏡の共同運用について協定を締結したことにより、今後、教育や観光面では浅口市が主導をとることになりました。研究成果をあげるとともに、より天文ファンのみなさんに開かれた天文台になるよう、さまざまなイベントを検討しているところですが、9月にはじめての市民親子観望会を開催。あいにくの曇り空でしたが、定員の倍以上となる100人以上の親子が参加し、雲間からのぞく月や惑星をはじめ、近くで見る188 cm望遠鏡の迫力満点の姿を楽しんでいただくことができました。今後は市内の学校対象の観測実習や旅行会社等を対象にモニター観望会等も開催し、さまざまな意見を取り入れていく予定です。

さらにせいめい望遠鏡も、ドーム内での望遠鏡見学ツアーや、(近い将来の実現に向けて)眼視での観望会についても検討を進めていきます。

はじめて岡山へ来たのは大学院生のとき、岡山観測所での観測でした。あれから気がつけば20年以上の月日が経ったとは…信じられない思いです。当時では考えもつかなかった(まだまだ先だと思っていた)京都大学天文台の開所、そして岡山観測所の共同利用終了。寂しさもありますが、ここ竹林寺山の上で始まる新たな取り組みは楽しみでもあります。いよいよ「天文県おかやま」本格的に始動です。

参考文献

- 1) 高梁川流域連盟編, 2014, 「〈特集〉星空のメッカ」, 高梁川, 72, 6